

國學院大學學術情報リポジトリ

「バラモンと悪漢」のプロットの発展について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩瀬, 由佳, Iwase, Yuka メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000477

「バラモンと悪漢」のプロットの 発展について

岩瀬由佳

「バラモンと悪漢⁽¹⁾」の話は、インドでは『ヒトーパデーシャ』を含めた『パンチャタントラ』版に含まれる⁽²⁾。インドおよびアラブの民話でも、また書承でも、『パンチャタントラ』に起源を持つ作品以外には、この話を含む大衆文学や仏教説話は知られていない⁽³⁾。本研究では、アラビア語等のセム系言語によるパフラヴィー系諸版を含めた『パンチャタントラ』伝本⁽⁴⁾による13バージョンを比較し、プロットの相違点を調べる。パフラヴィー系諸版の特徴からオリジナルなパフラヴィー版を想定しつつ、『パンチャタントラ』諸版の発展を考察する。

『パンチャタントラ』各バージョンの「バラモンと悪漢」に関して、Venkatasubbiah (1929: 2-3) は、以下の4点を論じている：

- (1) 物語の導入詩節
- (2) 物語の位置
- (3) 悪漢の人数
- (4) 悪漢のバラモンへの発言内容（羊を何と云うか）

第1のトピックに関しては、パフラヴィー系諸版における寓意部分を含めて論じる必要があるが、本論文はストーリーそのもののみを論じるため、ここでは扱わない。第2のトピックは、「バラモンと悪漢」が物語られる位置が第1巻か第3巻かのどちらがオリジナルかを論じるものであるが、Durgasimhaバージョンを除けば、パフラヴィー系諸版を含め現存するすべての版においてこの物語は第3巻に相当する部分に位置しており、特に論ずる意義が認められない。第3のトピックは、HertelおよびGeib (1969: 179) が論じているが、パフラヴィー系諸版の発展についてより詳細に論じる必要があるだろう。

本研究では、第3のトピックに加えて、以下のトピックを第4のトピックと併せて、プロットの発展を論じる：

- (5) バラモンが身を浄めるかどうか

1. 物語のあらすじ

1.1. 物語の背景とあらすじ

現存する全ての『パンチャタントラ』版において、「バラモンと悪漢」の話は、第3巻またはカラスとフクロウ（またはミミズク）の戦いについての章の中で語られる。カラスの大臣が王に対して、策略の有効性を説くためにこの話を物語る。

「バラモンと悪漢」のあらすじは、散文、韻文の『パンチャタントラ』版いずれでも、おおよそ次の通りである：

あるバラモン⁽⁵⁾が犠牲に捧げるために羊⁽⁶⁾を入手し、自宅に向かう。その途中、悪漢たちがそれを見て、バラモンから羊をだまし取ることにする。悪漢たちは3つのグループに分かれて、それぞれ、バラモンに向かって、バラモンが持っているのは羊ではなく不浄な動物だと言う。バラモンは不審に思うが、3度にわたって言われ続けたため、自分が持っているのは羊ではないと信じてしまい、羊を放棄する。悪漢たちは、バラモンの羊を手に入れて食べてしまう。

1.2. テキストごとの「バラモンと悪漢」ストーリー進行

下の表1から表3のストーリー進行表⁽⁷⁾に示すとおり、テキストにより話の長さが異なるほか、細かな違いは多数あるが、ストーリーの主な相違は、悪漢の人数と、悪漢の発言内容、悪漢の言葉に対するバラモンの反応にある⁽⁸⁾。

表1：「バラモンと悪漢」ストーリー進行表 (TĀ, PĀ, Spl)

	TĀ	PĀ	Spl
①主人公の職業(名前)	あるバラモン (なし)	アグニホートラ ⁽⁹⁾ をするバラモン (ミトラシャルマン)	アグニホートラをするバラモン (ミトラシャルマン)
②時期	—	マーガ月 (1～2月)	マーガ月 (1～2月)
③主人公の行動	—	村に行き、檀家に頼む：「来る新月の晩に犠牲祭を行います。そのために羊を1頭ください。」聖典に則った太った羊を一頭もらう。	村に行き、檀家に頼む：「来る新月の晩に犠牲祭を行います。祭式のために羊を1頭ください。」非常に太った羊を一頭もらう。
	犠牲のために羊を入手して家に向かう。	羊があちこち歩き回れるのを見て、肩に担ぎ、すぐに町に向かう。	羊があちこち歩き回れるのを見て、肩に担ぎ、すぐに町に向かう。

④悪漢の行動	その途中で、ならず者たちがそれを見て話し合う。	道を歩いていると、飢えてやせ衰えたならず者3人が、彼が太った羊を肩に担いでいるのを見つけて話し合う。	道を歩いていると、飢えてやせ衰えたならず者3人が、彼が太った羊を肩に担いでいるのを見つけて話し合う。
	「今日はこの羊を食べよう。」	「ああ、この羊を食べれば、今日の、この雪が降っているのもしのげるだろう。」	「ああ、この羊を食べれば、今日の雪が降っているのも何でもなくなるだろう。こいつを騙して、取り上げよう。」
⑤1番目の悪漢	2、3人に別れて前方からやってくる。	ならず者の1人が、衣服を替えて彼の方にやってくる。	ならず者の1人が、衣服を替えて彼の方にやってくる。
	1人目がバラモンに話しかける。「めでたきお方、あなたが肩に担いでいるこれは、本当に立派な犬ではありませんか。猛獣を殺すのがうまいでしょう。」と言って立ち去る。	側を通り過ぎながら「おや、おや、アグニホートラをするお方。このように道に外れた、笑いものにされるようなことをするとはなんぞや。この不浄な犬を肩に乗せて歩いているとは。このように言われています：犬や雄鳥や賤民、特にロバやラクダは、触れるのは同様のことだと言われている。それ故、それらに触れるべきではない、と。」	側を通り過ぎながら「おや、おや、アグニホートラをするお方。このように道に外れた、笑いものにされるようなことをするとはなんぞや。この不浄な犬を肩に乗せて歩いているとは。このように言われています：犬や雄鳥や賤民、特にロバやラクダは、触れるのは同様のことだと言われている。それ故、それらに触れるべきではない、と。」
主人公の反応	「この悪者は何ということ言うのだろう。どうして私が犬を肩に担ぐだろう。」	激怒して「お前は盲目なのか。羊を犬と言うなんて。」	激怒して「お前は盲目なのか。羊を犬と言うなんて。」
悪漢の返答・反応	—	「バラモン様、怒りなざるな。お望みのままにお行きなさい。」	「バラモン様、怒りなざるな。お望みのままにお行きなさい。」
⑥2番目の悪漢	そうこうしているうちに、別の2人のならず者がやってくる。この2人もバラモンに話しかける。	またしばらく道を行くと、2人目のならず者が彼に近づく。	いくらか森の中に入ると、2人目のならず者が彼に近づく。

	「バラモン様、これは何とふさわしくないことをなさっているのか。ヤジュニヤ・ウパヴィータ ⁽¹⁰⁾ と数珠を身につけ、水瓶を持ち、トリブンドラカ ⁽¹¹⁾ をつけていながら、背中に犬とはこれいかに。しかし、ウサギや鹿や豚を殺すのがうまいでしょう。」と言って、通り過ぎる。	「ああ、嘆かわしい、嘆かわしい。尊者様よ、たとえあなたのこの死んだ子牛がかわいいとは言え、肩に担ぐのはよくありません。このように言われています：獣であれ、人間であれ、死んだものに触れるのは愚か者だ。パンチャガヴィヤ ⁽¹²⁾ やチャーンドラーヤナ ⁽¹³⁾ によって浄められる、と。」	「ああ、バラモン様よ、嘆かわしい。たとえあなたのこの死んだ子牛がかわいいとは言え、肩に担ぐことはできません。このように言われています：獣であれ、人間であれ、死んだものに触れるのは愚か者だ。パンチャガヴィヤやチャーンドラーヤナによって浄められる、と。」
主人公の反応	好奇心から羊を地面に置いて、耳や角や睾丸や尻尾等の身体部分を詳しく触って「奴等はおろかなことよ。どうしてこれが犬だと決めつけるのだろうか。」	「おや、お前は盲目なのか。羊を子牛と言うとは。」	「おや、お前は盲目なのか。羊を死んだ子牛と言うとは。」
悪漢の返答・反応	—	「尊者様、怒ってはいけません。私は知らないで言ったのです。ご自分のお望みのままにふるまいなさい。」	「尊者様、怒ってはいけません。私は知らないで言ったのです。ご自分のお望みのままにふるまいなさい。」
⑦3番目の悪漢	バラモンは、もう一度肩に担いで歩き出す。そこでまた、別の3人がバラモンに話しかける。	バラモンは、森の中に少し入っていく。すると3人目のならず者が、衣服を替えて、彼に近づいてくる。	バラモンは、森の中に少し入っていく。すると3人目のならず者が、彼に近づいてくる。
	「我々に触るな。あつちを通ってくれ。お前が清らかなのは見かけだけだ。バラモン様よ、犬に触れて、あんたは狩人になるだろう。」と言って立ち去る。	「おや、これはよくない。ロバを肩に担いで運ぶとは。このように言われています：ロバに触れる人は、知らずにであれ、あるいは知っているであれ、自分の罪を静めるために着衣の沐浴が定められている、と。他の誰かが見ないうちに、これを捨てなさい。」	「おや、これはよくない。ロバを肩に担いで運ぶとは。それを捨てなさい。このように言われています：ロバに触れる人は、知っている、あるいは知らなくても、自分の罪を静めるために着衣の沐浴が定められている、と。誰かが見ないうちに、これを捨てなさい。」

⑧ 4 番目の悪漢	—	—	—
⑨ 主人公の反応	『どうしてこんなことになるのだろう。大勢の言うことは正しい。世の中には奇妙なことがあるのかもしれない。おそらくこれは、犬の姿をした魔物なのだろう。それなら、元の姿に戻るかもしれない。』	それを羊の姿をした魔物だと思って、	その羊をロバだと思って、
	贖罪を恐れて地面に置いて、見もせずに立ち去る。	地面に投げつけ、恐れて家を目指して逃げる。	恐れて地面に投げつけ、家を目指して逃げ出す。
⑩ 結末	ならず者たちは羊を食べる。	3人は羊を捕まえて食べる。	3人は集まって羊を捕まえ、望みのままに食べ始める。

表 2 : 「バラモンと悪漢」ストーリー進行表 (SP、KSS、BKM、Hit)

	SP	KSS	BKM	Hit
①	あるバラモン (なし)	あるバラモン (なし)	あるバラモン (なし)	あるバラモン (なし)
②	—	—	—	—
③	—	村から買った	—	ガウタマの森で犠牲を始めた。犠牲のために別の村から山羊を買って、
	犠牲のために羊を運ぶ。	羊を肩に担いで歩いている。	肩に羊をのせて歩いている。	肩に載せて歩いていると、
④	道を歩いていると、ならず者たちが彼を見て考える。	路上で、大勢のならず者が羊を見て、盗みたいと思う。	ならず者たちが騙してやろうと集団になって相談する。	3人のならず者が彼を見た。『もし何かの策略でこの山羊が手に入れば、聡明さがわかるというものだ。』と考え、そのバラモンがやってくるのを待って、1クロージャおきに3本の木の下に立っている。

	「このバラモンに羊を捨てさせなければならん。」	—	—	(上を参照)
⑤	1人がやって来る。	1人がやって来て、驚いて言う。		1人のならず者が、通っていくバラモンに言う。
	「バラモン様、これは何ですか。」	「バラモン様、一体またどうして、あなたはこの犬を手に入れて肩に担いでいるのか。捨てなさい。」	1人が「おや、バラモン様、これは誰の猟犬ですか。それとも、路上で強奪して肩に担いだのか、王様からの贈り物ですか。」と言って、遠くへ行く。	「おや、バラモン様、肩に犬を担ぐとは、どういうことですか。」
	「羊を肩に担いでいる。」	それを聞いても気にも留めずに歩き続ける。	—	「これは犬ではなく、犠牲の山羊である。」
	彼を軽蔑する。	—	—	—
⑥	もう1人がやって来て尋ねる。	別の2人が近づいて、前で同じようなことを言う。	他の2人が言う。	その隣にいた別のならず者が全く同様に言う。
	「バラモン様、これは何ですか。」	(上を参照)	「おや、このバラモンが運んでいる奇妙なものをご覧なさい。犬を運んでいるとは。たぶん、こいつはバラモンの格好をした猟師なのだろう。」	(上を参照)
	「羊を担いでいる。」	疑わしく思って、羊を調べながら歩く。	2人の言うことを聞いて、それを地面に置き、恐れて尻尾や角や睾丸などを手で触ってみる。「頭のおかしい奴等が、これは羊ではないと喚いている。」と独り言を言う。また羊を素早く肩に担いで、町に近づく。	これを聞いて、山羊を地面に置いて何度もよく調べ、再び肩に載せる。
	また彼を軽蔑する。	—	—	—

⑦	彼が歩いて行くと、また他の者たちがやって来る。	別の3人が近づいて来る。	カクシャー（服の裾）を整えた服装をした者たちが言う。	—
	「おや、バラモン様のお作法なことよ。最上のカーストの人が犬を運んで歩いてるとはどういうことですか。」	「ヤジュニャ・ウパヴィータと犬と一緒に運んでいるとはこれいかに。はあ、あなたはバラモンではなく獵師で、この犬で鹿を殺すのですね。」	「このバラモンは、犬殺し同様に、触れてはならない罪人だ。おや、家柄を辱めるこやつは、人前で恥ずかしいと思わずに、犬を肩に載せて運び、道を通り、触れるとは。」	—
⑧	—	—	—	—
⑨	熟考：『私の感覚は何とおかしいのだろうか。皆の感じ方は全く違う。誰でも常に間違ふことはある。それで、私はそういう風に捕らわれたのだろうか。』	今度はこう考える：『私は何かの死霊によって目をくらまされて騙されたのだ。みんなの見方が間違っているわけがない。』	大変嘆いて、羊を捨て、悲しむ。大勢の人がお案じことを言うので、隠してしまったのである。『疑いなく、幻力を使う魔物が、この羊なのだろう。』	—
	羊を捨てて、沐浴しに行く。	羊を捨てて、沐浴し、帰宅する。	ならず者に騙されて、羊を捨てる。	不安に思いながら立ち去る。
⑩	ならず者たちは羊を捕まえて食べる。	ならず者たちは羊を連れて行き、望むまま一緒に食べる。	ならず者たちは、羊を取って食べ、喜ぶ。	—

表3：「バラモンと悪漢」ストーリー進行表 (Arb1、Arb2、Syr1、Syr2)⁽¹⁴⁾

	Arb1	Arb2	Syr1	Syr2
①	ある修道僧（なし）	ある修道僧（なし）	ある修道僧（なし）	ある修道僧（なし）
②	—	—	—	—
③	犠牲に捧げるために大きな山羊を一頭買う。	犠牲に捧げるために大きな太った山羊を一頭買う。	—	—
	山羊を連れて歩く。	山羊を連れて歩く。	雄山羊を飼い、神への捧げ物にしようと思う。	神への犠牲に捧げようと、よく超えた雄山羊を一頭買う。

④	詐欺師の一団がそれを見て、彼からそれを騙し取ろうと企む。	詐欺師の一団がそれを見て、彼を騙そうと企む。	家に向かって歩いてみると、数人の男が良からぬ打合せをして、めいめい別々に彼の元にやってくる。	彼が雄山羊を引き連れて家に向かっていると、3人のならず者が彼を見て、三か所で待ち伏せする。
	—	—	—	—
⑤	1人が姿を現して彼に言う。	1人が姿を現して彼に言う。	1人が修道僧に言う。	1人が彼に言う。
	「修道僧さん、あなたが連れてきているこの犬は何ですか。」	「修道僧さん、あなたが連れてきているこの犬は何ですか。」	「枷をつけて連れていらっしゃるこの犬が、何のために必要なのですか。」	「綱をつけて連れていらっしゃるこの犬が、何をしようというのですか。」
	—	—	—	—
	—	—	—	—
⑥	もう1人が現れて言う。	もう1人が現れて言う。	別の男が言う。	2人目の男が彼に言う。
	「修道僧の服を着ているこの男は、修道僧ではないと思う。だって、修道僧は犬を連れて歩かないから。」	「修道僧さん、あなたはこの犬で狩りをなさりたいのですか。」	「犬を連れていらっしゃるとは、狩りにも行きたいのですか。」	「修道僧様、あなたはこの犬で狩りでもなさりたいのですか。」
	—	—	—	—
	—	—	—	—
⑦	もう1人が現れて言う。	3人目が現れて言う。	また別の男が言う。	3番目の男が彼に出会って言う。
	「あんたはこの犬で狩りでもしたいのかい？」	「修道僧の服を身まとっているこの男は、修道僧ではありませんね。だって、修道僧は犬を連れて歩きませんから。」	「連れていらっしゃるこの犬は、お売りになるのですか。」	「修道僧や隠遁の行者は、実際、犬などに用はないはずだ。それなら、こいつは修道僧ではないのだ。」
⑧	—	—	もう1人が言う。「犬に触れたら、身体を洗って清めなければならぬのに。」	—

⑨	自分が連れてくるのは犬だということに疑いを持たなくなる。『たぶん、私に売った奴が、私の目を眩ませて騙したのだろう。』	「たぶん、私に売った奴が、私の目を眩ませたのだろう。」	『私は、本当に犬を連れてくるのかしらん。売りつけた男が目眩まし（の術）をかけて、私の目を見えなくしてしまったに違いない。』	気の毒な修道僧は、そのならず者たちの言葉を聞いて気が弱くなり、子羊を彼らの手元に残す。『たぶん、私にこの子羊を売った奴等が私の目を眩ませて、子羊の代わりに犬を渡したのだ。』
	山羊を手放して行ってしまふ。	山羊を手放す。	雄山羊を放してそのままにし、家に帰ると身体を洗い清める。	(上を参照)
⑩	一団は山羊を手に入れて殺し、分ける。	一団は山羊を手に入れ、自分たちの中で分ける。	男たちは修道僧が雄山羊を捨て置いたのを見て、それを捕まえて食べる。	—

2. 「バラモンと悪漢」のプロットの発展

2.1. 悪漢の人数

バラモンから犠牲用の羊を騙し取ろうとする悪漢の人数は、以下の3タイプに分類できる。

タイプ1：6人が3つのグループに分かれ、次第に人数を増やしていく。

… TĀ, KSS, BKM

タイプ2：3グループに分かれるが、第1・第2グループは1名ずつで、最後のみ複数（3人以上）で現れる。… SP

タイプ3：3人（または4人）が1人ずつバラモンに声を掛ける。

… PĀ, Spl, Hit⁽¹⁵⁾, Arb1, Arb2, Syr1（4人）、Syr2, Heb1, Heb2

2.1.1. 悪漢の人数についてのGeibによる推論

Geib (1969: 179) は、Hertelに同意し、人数を増やすことは話を効果的に盛り上げるので、もともとは6人の悪漢が3つのグループに分かれてバラモンに出会う内容だったのだろうと考える。さらにGeibによれば、従って、6人を3つのグループに分けるという込み入った分け方を、1つのグループが1人の悪漢に対応するように単純化することは容易に想像できる。したがって、こうした単純化は、異なる系統で別々に起こりえると指摘している。

タイプ2の『南伝パンチャタントラ』は、Geibの推論の途中経過を示しているのかもしれない。もともと、悪漢が1人ずつ登場していたならば、『南伝パンチャ

タントラ』は3度目だけを複数人数にしたことになる。しかし、悪漢の人数を段階的に増やすならば物語の効果を高めるだろうが、最後だけ増やしても同様の効果は期待できないのではないだろうか。

Geibによる推論は、蓋然性が高いように思われるが、パフラヴィー系諸版の中でシリア語旧版が他にない特徴を示していることは、どのように説明できるだろうか。

2. 1. 2. パフラヴィー系諸版の発展

パフラヴィー系諸版は、すべてが一致してタイプ3に属していることから、失われたパフラヴィー語版も同様であったと考えられる。アラビア語版をもととしないシリア語旧版のみ、悪漢は3人ではなく4人がそれぞれ修道僧に話しかけている。これは、2つの可能性があるだろう。シリア語旧版の作者が、悪漢の数を増やしたのかもしれない。しかし一方で、アラビア語版のもととなったパフラヴィー語版とシリア語旧版のもとになったものが異なり、後者ですでに悪漢が4人になっていた可能性も否定できない。どの段階で悪漢の人数が増えたにせよ、人数を増やした筆記者は、修道僧の心を惑わし切るのに3度では不十分だと考えたのかもしれない。

2. 2. 悪漢とバラモンの羊を巡るやり取り

悪漢とバラモンの羊を巡るやり取りは、①悪漢グループがバラモンが担いでいる羊を何と言うかにより、以下のように3つのタイプに分類できる。また、②バラモンが自分が運んでいる動物を最後に何だと信じ込むかにより、各タイプはさらに細かく分類できる。

タイプ1：①全グループとも犬だと言う。

1a：②(羊の姿をした)魔物だと思う。… TĀ, BKM

1b：②犬だと思う(または、明言しないが文脈から犬だと考えられる)。
…(KSS), Arb1, (Arb2), Syr1, Syr2, Heb1, (Heb2)

1c：②その他(不安に思うのみ)… Hit

タイプ2：①第1・第2グループは動物名に言及せず、第3グループのみ犬だと言う。

②(明言しないが、文脈から犬だと考えられる)…(SP)

タイプ3：①グループごとに異なる動物だと言う。

3a：②羊の姿をした魔物だと思う。… PĀ

3b：②ロバだと思う。… Spl

2. 2. 1. 『南伝パンチャタントラ』の発展

タイプ2の『南伝パンチャタントラ』では、第1・第2の悪漢グループは、バ

ラモンに「これは何か」と尋ねるのみで、特定の動物名を出さない。これは、タイプ3のテキスト群とは逆に全体に簡略化しているテキスト『南伝パンチャタントラ』において、第3の悪漢グループの発言とそれに対するバラモンの応答を物語のクライマックスと捉えているからかもしれない。バラモンは第1・第2グループによる発言を聞いて不安に思い、第3グループの発言によって、いよいよ自分が担っている動物が羊ではないとの確信に至るからである。

このテキストの作者は、第3グループの発言を際立たせることにより、第1・第2グループの発言は、ほやけた内容で十分機能を果たしていると考えたのだろう。その前提として、もとは第1・第2グループとも、タイプ1と同様に、悪漢は羊を犬だと言っていたと考えられる。

2. 2. 2. 『パンチャーキヤーナカ』と『小本パンチャタントラ』の発展

タイプ3の『パンチャーキヤーナカ』と『小本パンチャタントラ』では、共通して、1人目の悪漢は犬、2人目は死んだ子牛、3人目はロバをバラモンが担いでいると言う。これら2テキストは文言のレベルで非常に近いが、②では一致していない。タイプ3aの『パンチャーキヤーナカ』がタイプ1aと一致している一方で、タイプ3bの『小本パンチャタントラ』では、3人目の悪漢の発言内容を受けている。自分が運んでいる羊に対して次々と異なる動物名を挙げられた後に、バラモンがどう考えるか。物語の流れとして自然なのはタイプ3aの方ではないだろうか。タイプ3bは、3人に異なる動物名を言われたのに、3人目を正しいと考える心理的あるいは論理的根拠に欠けるからである。

2. 2. 3. タイプ1とタイプ2の関係

タイプ2は、第3グループが犬に言及していることから、タイプ1に基づいていると考えられる。タイプ3は、グループごとに言及する動物が異なるが、1人目の悪漢が犬だと言っているのも、やはりもとはタイプ1のように3人（グループ）とも犬に言及していた可能性がある。したがって、タイプ1は、3つの中で多数派を占めるだけでなく、物語の発展の観点から見て、オリジナルを保持していると考えられる。

また、すべてのパフラヴィー系諸版がタイプ1に属することから、失われたパフラヴィー語版においても同様に、悪漢全員が修道僧の羊を犬だと発言したと思われる。この点に関して、パフラヴィー系諸版はオリジナルな要素を保持していると言えるかもしれない。

2. 3. バラモンは身を浄めるか

犬は、インド文化圏のみならず、中東起源の一神教においても不浄な動物である⁽¹⁶⁾。悪漢がバラモンに対して、犬などの不浄な動物に触れたら身を浄めるべ

きである旨の発言をするのは、『パンチャーキヤーナカ』と『小本パンチャタントラ』およびシリア語旧版の3テキストのみである。

物語の最後に、①バラモンが身を浄めたり、衣服を洗うかどうかによって、2つのタイプに分類できる。さらに、上の2.2. で取り上げた、②バラモンが自分が運んでいる動物を最後に何だと信じ込むかを合わせて考えることができるだろう。

タイプ1：①身を浄める、または衣服を洗う。

②犬だと思ふ（または、明言しないが文脈から犬だと考えられる）。

…(SP)、(KSS)、Syr1

タイプ2：①身を浄めたり、衣服を洗ったりしない。

2a：②魔物だと思ふ。… TĀ, PĀ, BKM

2b：②犬だと思ふ（または、明言しないが文脈から犬だと考えられる）。

… Arb1、(Arb2)、Syr2、Heb1、(Heb2)

2c：②ロバだと思ふ。… Spl

2d：②その他（不安に思ふのみ）… Hit

2.3.1. パフラヴィー系諸版の発展

13バージョンの中で、シリア語旧版においてのみ、悪漢は修道僧に対して身を浄めるべきだと言ひ、かつ、修道僧が実際に身を洗い清める⁽¹⁷⁾。一方、『小本パンチャタントラ』と『パンチャーキヤーナカ』では、バラモンは身を浄めず、衣服も洗わない。

仮に失われたパフラヴィー語版がシリア語旧版と同様にタイプ1に属するならば、修道僧が山羊を犬だと信じてしまう点でシリア語旧版と共通するアラビア語版の作者イブン・ムカフファアが、意図的に修道僧の浄めの行為を削除したことになる。しかし、悪漢の修道僧に対する発言を考慮すれば、シリア語旧版が特に、不浄な動物に触れた後の身の浄めを強調していることがわかる。したがって、失われたパフラヴィー語版では、修道僧は身を浄める行為はしなかったのではないかと考えられる。

2.3.2. タイプ1とタイプ2の関係

サンスクリット語諸版の中で、タイプ1に属するのは『南伝パンチャタントラ』と『カタールサリットサーガラ』の2テキストのみである。両テキストは、概して物語が短く、特に後者は簡略化する傾向があるが、だからといってオリジナルの要素を保持している証左にはならない。最大限まで簡略化しているからこそ、読者の腑に落ちる動作や台詞を追加することはあり得るだろう。不浄な動物に触れた、だから身を浄めるのは当然だ、という論理が、テキストごとに個別に働いたのかもしれない。

タイプ2に属するテキストは、バラモンが羊を何だと思うかに関わらないことがわかる。タイプ1は後の加筆または改ざんによるもので、オリジナルな『パンチャタントラ』はタイプ2だったのではないだろうか。バラモンまたは修道僧は自分が担いでいるのが不浄な犬だと思ったからには身を浄めるはずだと、テキストの作者あるいは写本の書写者が考え、加筆したのかもしれない。

2. 4. バラモンが運ぶ羊は魔物か犬か

バラモンが自分が運んでいる羊を最後に何だと思うかは、上の2. 2. で見たように、大きく2つのタイプに分類できる。

タイプ1：魔物だと思う。… TĀ, PĀ, BKM

タイプ2：犬だと思う（または、明言しないが文脈から犬だと考えられる）。

…(SP), (KSS), Arb1, (Arb2), Syr1, Syr2, Heb1, (Heb2)

その他1：ロバだと思う。… Spl

その他2：(不安に思うのみ) … Hit

2. 4. 1. パフラヴィー系諸版の発展

パフラヴィー系諸版がすべてタイプ2に属することから、失われたパフラヴィー語版も同様であったと考えられる。さらに、シャイホー校訂のアラビア語版とヘブライ語新版を除くすべてが一致していることは、失われたパフラヴィー語版においても、修道僧が山羊を犬だと信じてしまったとははっきり書かれていなかったことを示しているのかもしれない。一方で、パフラヴィー語版がタイプ1を改変したのか、パフラヴィー語版が基づくサンスクリット語版がすでにタイプ2だったのかは断定できない。

2つのアラビア語版は、文言のレベルで非常に似ているが、この部分に関しては、シャイホー版はアッザーム版に比べてやや簡略である。前者が失われたパフラヴィー語版に近いとすれば、後者は言葉を補ったのかもしれない。しかし、シリア語旧版との一致から、アッザーム版の方が失われたパフラヴィー語版に近い可能性が高いように思われる。そうであれば、シャイホー版に欠落があるのかもしれない。

物語の後半を大きく変えている『ヒトーバデーシャ』を除けば、2. 3. の議論においてタイプ1に属するテキストは、1aと1bに分かれる。これらが仮に同じ祖型に遡るとすれば、失われたパフラヴィー語版は、タイプ1b（はっきり「犬」とは書かなかったかもしれないが）だったのかもしれない。この版がタイプ1aであったならば、アラビア語版が「魔物」を「犬」に変える必要はなかったと考えられるからである。

2. 4. 2. タイプ1とタイプ2の関係

タイプ2に含まれる8つのテキストのうち、半数が犬だと明言していないことを踏まえると、仮に『南伝パンチャタントラ』、『カターサリットサーガラ』、パフラヴィー語版が同じ祖型に遡るとしても、その祖型バージョンにおいてバラモンが羊を「犬」だと思ったと明記してあったとは断定できない。

また、タイプ2は、パフラヴィー系諸版をまとめて1つのテキスト群ととらえれば、3つの系統のテキストから成る。すると、タイプ1とタイプ2に属する数は、ここで論じているものに限られているとは言え、数の上で優劣はないことになる。論理的に考えて、行きずりの他人から3度に渡って自分の羊を犬だと言われた結果、バラモンはどう思うのが自然だろうか。文化的背景を抜きにして現実的に考えれば、「本当は犬なのに、自分は騙されて羊だと思い込まされた」と考えるのではないだろうか。しかし、もしこれがオリジナルであるならば、わざわざ「魔物」を出す必然性があるだろうか。蓋然性の問題であるが、オリジナルな『パンチャタントラ』はむしろタイプ1の方で、後代の作者や書写者、あるいは別の文化圏の翻訳者が論理的に考えてタイプ2に改変したのではないだろうか。

3. まとめ

悪漢の人数については、オリジナルな『パンチャタントラ』では、徐々に人数を増やす形で合計6人であろうというGeibによる推論を支持しつつ、パフラヴィー系諸版の発展を論じた。パフラヴィー系諸版が一致していることから、失われたパフラヴィー語版も同様に、悪漢は3人で、1人ずつ修道僧に話しかけたと考えられる。シリア語旧版のみ悪漢が4人だが、人数が増えた理由は2つ考えられる。シリア語旧版の作者が悪漢の数を増やしたのかもしれないが、シリア語版のもととなったパフラヴィー語版ですでに悪漢が4人になっていた可能性も否定できない。

悪漢とバラモンの羊を巡るやり取りは、悪漢がバラモンが担いでいる羊を何と何と言うかによって、3タイプに分類できる。各タイプを詳細に検討した結果、オリジナルな『パンチャタントラ』は、パフラヴィー系諸版を含む多数派テキストと同様に、悪漢は3度にわたって羊を犬だと言っていたとの結論に至った。

バラモンが身を浄めるかどうかは、バラモンが自分の羊を不浄な動物だと信じてしまうかどうかに関わりがある。パフラヴィー系諸版については、シリア語旧版が特に身の浄めを強調していることに着目し、失われたパフラヴィー語版では修道僧は身を浄めなかったのではないかと結論づけた。サンスクリット語諸版の内部関係については、オリジナルな『パンチャタントラ』ではバラモンは身を浄めなかったが、テキストの作者あるいは写本の書写者が物語の筋から考えて書き換えた可能性を示した。

バラモンが、自分が運んでいる羊を何だと思うかについては、大きく2タイプに分類できる。パフラヴィー系諸版が一致していることから、失われたパフラヴィー語版も同様に、修道僧は山羊を犬だと思ふタイプに属すると考えられるが、はっきりとそう書かれていたかどうかは断言できない。オリジナルな『パンチャタントラ』では、バラモンは自分の羊を、羊の姿をした魔物だと思い込んだ可能性があると結論づけた。論理的に考えた後代または異文化圏の筆者（役割が何であれ）が、魔物から犬へと改変したと考えられるからである。

補遺

1. 「バラモンと悪漢」ヘブライ語旧版バージョン (Heb1) の全訳

ある男が犠牲を捧げようと一頭の鹿を買った。彼が歩いていると、三人の男が彼からそれを取り上げようと相談した。そのうちの1人が言った。「見てごらん、この僧はこんな犬を連れて歩いている。なぜそんなものが要るのだろう。」もう一人が言った。「私は僧の規則と僧の服については知っているつもりだ。しかし、私は彼のしていることがわからない。というのも、もしその通りなら、彼は犬を投げ出して衣服を洗い、身体を淨めなければならないだろうに。」三人目が言った。「あなたは僧だろう？ この犬を売り払いたいだろう？」彼らがこのような言葉を語りかけているうちに、その僧は、とうとう、自分が連れてきているのは犬だと思い込んだ。そして、心の中で思った。「私にそれを売った男が私をからかったなどと、誰がわかるのか。」こうして彼らが彼を騙したので、彼は鹿を手放して、家で大急ぎで身を淨め、衣服を洗った。三人の男たちは、鹿を取り、殺して、自分たちの間で分けた。

2. 「バラモンと悪漢」ヘブライ語新版バージョン (Heb2) の全訳

僧が犠牲を捧げるために少しのお金で鹿を買った。そして、それを犠牲に捧げるため、連れて行こうと、その後ろから綱を持って行った。三人の詐欺師が彼を見て、ただの人の姿をして、道に立ちふさがった。一人が進み出て言った。「この犬は何ですか。」二人目が出てきて言った。「犬を連れて狩りをするために、どこへ行くのですか。」三人目が進み出て言った。「僧の山羊の代わりに犬ですか。」盗人の技は巧みだった。そこで僧は鹿を手放し、綱を取った。こうして彼らはその口で彼を侮り、その舌で彼を欺いた（詩篇78：36）。このようにして、その三人は、ごまかしと嘘によって、大胆にもその鹿を取り上げた。

略語の説明

Arb1: アッザーム校訂『カーラとディムナ』（‘Azzām 1981）

Arb2: シャイホウ校訂『カーラとディムナ』（Cheykhō 1905）

- BKM: 『ブリハットカターマンジャリー』 (Mankowski 1892)
 DBI: *Dictionary of Biblical Imagery* (Ryken et. al. 1998)
 EI: *The Encyclopaedia of Islam*, New Edition. Vol. IV (Van Donzel et. al. ed. 1978)
 Heb2: ヘブライ語新版 (Derenbourg 1881)
 Hit: 『ヒトバデーシャ』 (Kāle 1967)
 KSS: 『カタースリットサーガラ』 (Durgāprasād and Parab 1930)
 PĀ: 『パンチャーキヤーナカ』 (Hertel 1908)
 SP: 『南伝パンチャタントラ』 (Hertel 1906)
 Spl: 『小本パンチャタントラ』 (Bühler 1891)
 Syr1: シリア語旧版 (Schulthess 1911)
 Syr2: シリア語新版 (Wright 1885)
 TĀ: 『タントラーキヤーイカ』 (Hertel 1904)

文献目録

- ‘Azzām, ‘Abd al-Wahhāb, ed. *Kitāb kalīlah wa-dimnah*. Cairo 1941. 2nd ed. Beirut 1981.
- Benfey, Theodor. *Pantschatantra: fünf Bücher indischer Fabeln, Märchen und Erzählungen*. Aus dem Sanskrit übersetzt mit Einleitung und Anmerkungen. vol.1. Leipzig 1859. Repr. Hildesheim: Georg Olms Verlagsbuchhanklung 1966.
- Bühler, G., ed. *Pañcatantra II & III*. Bombay Sanskrit Series No. 1. Bombay 1891.
- Cheykho, L. *‘Aqdam nuskhah makhṭūṭah mu‘arrakhah li-kitāb kalīlah wa-dimnah. La version arabe de Kalīlah et Dimnah d’après le plus ancien manuscrit arabe daté, publiée par le P. L. Cheikho S. J.* Beyrouth 1905.
- Derenbourg, Joseph, ed. *Deux versions hébraïques du livre de Kalīlah et Dimnāh*. Paris 1881.
- De Vies, Ad. *Dictionary of Symbols and Imagery*. North-Holland Publishing Company. Amsterdam and London 1974.
- Durgāprasād, Pandit and Kāśīnāth Pāndurang Parab, ed. *Kathāsaritsāgara of Somadevabhata*. Fourth ed. Revised by Wāsudev Laxman Śāstrī Pañśīkar. Bombay 1930.
- Edgerton, Franklin. *The Panchatantra Reconstructed*. Vol. 1: Text and Critical Apparatus. New Haven: American Oriental Society 1924a. (= American Oriental Series vol. 2)
- . *The Panchatantra Reconstructed*. Vol. 2: Introduction and Translation. New Haven: American Oriental Society 1924b. (= American Oriental Series vol. 3)
- Hertel, Johannes, ed. *Über das Tantrākhyāyika, die kasmīrische Rezension des Pañcatantra*. Leipzig 1904.
- , ed. *Das Südliche Pañcatantra. Sanskrittext der Rezension b mit den Lesarten der besten HSS. der Rezension a*. Abhandlungen der Königlich Sächsischen Gesellschaft der Wissenschaften, Phil.-hist. Klasse, vol. 24, No. 5, Berlin 1906.
- , ed. *The Panchatantra. A Collection of Ancient Hindu Tales in the Recension, called Pancakhyānaka, and dated 1199 A.D., of the Jaina Monk, Purnabhadra*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press 1908.
- . *The Panchatantra-Text of Purnabhadra: Critical Introduction and List of Variants*. Harvard Oriental Series 12. Cambridge, Mass.: Harvard University Press 1912.
- , ed. *The Panchatantra. A Collection of Ancient Hindu Tales in Its Oldest Recension, the Kashmirian, Entitled Tantrākhyāyika*. The original Sanskrit text, Editio Minor, reprinted from the critical Editio Major which was made for the Königlische Gesellschaft der Wissenschaften zu Göttingen. Cambridge, Mass.: Harvard University Press 1915.

- Kāle, M.R., ed., tr. *Hitopadeśa of Nārāyaṇa*. 6th edn. Delhi: Motilal Banarsidass 1967.
- Mankowski, Leo von, ed, tr. *Der Auszug aus dem Pañcatantra in Kshemendras Brihathkathāmañjarī*. Leipzig: Otto Harrassowitz 1892.
- Moier-Williams, Monier. *A Sanskrit-English Dictionary: Etymologically and Philologically Arranged, with Special Reference to Cognate Indo-European Languages*. New Edition. Clarendon Press. Oxford 1899.
- Ryken, Leland, James C. Wilhoit, and Tremper Longman III ed. *Dictionary of Biblical Imagery*. InterVarsity Press. Illinois and Leicester 1998.
- Schulthess, F., ed., tr. *Kalīla und Dimna: die altsyrische Version des indischen Fürstenspiegels (Pañcatantra) oder Bidpai's Fabeln*. Berlin 1911.
- Stutley, Margaret and James. *A Dictionary of Hinduism: Its Mythology, Folklore and Development 1500B.C. - A.D. 1500*. Paperback Edition. Routledge and Kegan Paul. London, Melbourne and Henley 1985.
- Van Donzel, E., B. Lewis and Ch. Pellat ed. *The Encyclopaedia of Islam*. New Edition. Volume IV. E. J. Brill. Leiden 1978.
- Venkatasubbiah. "Pañcatantra Studies 4: The Brāhmana and the Rogues". *Journal of the Bombay Branch of the Royal Asiatic Society* 5 (1929): 1-10.
- Wright, W., ed. *The Book of Kalīlah and Dimnah or the Fables of Bidpai: Translated from Arabic into Syriac, Being the Later Syriac Version (Eleventh Century)*. Oxford 1885. Amsterdam 1981.

注

- (1) この論文では、物語の題名を「バラモンと悪漢」とし、あらずじや議論でも主な登場人物は「バラモン」と「悪漢」に統一する。ただし、個々のテキストについての議論、ストーリー進行表および翻訳では、原文に従って訳す。
- (2) 原典の詳細については、Benfey 1859: 179-84, Edgerton 1924b: 190-1を参照。
- (3) Type AT 1551. K451.2。このタイプの民話は複数採話されているが、「バラモンと悪漢」のバラレルと思われるものは見つかっていない。
- (4) TĀ III-6 (Hertel 1904: 82-83)、PĀ III-4 (Hertel 1908: 194-195)、Spl III-3 (Bühler 1981: 60-61)、SP III-5 (Hertel 1906: 47)、Hit IV-9 (Kale 1967: 95)、KSS X-60, 62-69 (Durgāprasād and Parab 1930: 325-326)、BKM III, 30b-40a (Mankowski 1892: 22-23)、Arb1 IV-3 (‘Azzām 1981: 198)、Arb2 IV-3 (Cheykhō 1905: 152-153)、Syr1 VI-4 (Schulthess 1911: 100-101)、Syr2 (Wright 1885: 216-217)、Heb1 (Derenbourg 1881: 88-89)、Heb2 (Derenbourg 1881: 385)。
- (5) パフラヴィー系諸版では「修道僧」である。
- (6) 『ヒトバデーシャ』およびパフラヴィー系諸版では「山羊」である。
- (7) 表形式ではあるが、可能な限り物語の翻訳に近づけた。特に登場人物の台詞部分は、原語からの翻訳をそのまま収録している。
- (8) 各表の⑤⑥⑦⑨参照。
- (9) *agnihotra-*。火への供犠。バラモンまたはヴァーイシャの家の主人が生涯を通して行う、朝夕の供犠。Stutley 1985: 6b-7a。
- (10) *yajñopavīta-*。左肩から右脇にかける聖紐 (Monier-Williams 1899: 840b, Stutley 1985: 344a)。
- (11) *tripundraka-*。宗派を示す額の印 (Monier-Williams 1899: 459b)。pundra-については、Stutley 1985: 236b。
- (12) *pañcagavya-*。雌牛から産出する5つのもの、すなわち、乳、凝乳、ギー、尿、牛糞 (Monier-Williams 1899: 575c)。
- (13) *cāndrāyaṇa-*。月齢に従って行う宗教的苦行 (断食) (Monier-Williams 1899: 392c)。

- (14) ヘブライ語旧版およびヘブライ語新版については、紙幅の都合上割愛し、補遺に「バラモンと悪漢」両バージョンの全訳を掲載する。
- (15) 『ヒトパデーシャ』では、悪漢は3人だが、実際にバラモンに声を掛けるのは2人である。これは、悪漢の登場の仕方やバラモンへの発話が同様であったため、写本の作者が3人目の部分を書き落とした可能性がある。
- (16) De Vries 1974: 172。ユダヤ教・キリスト教については、DBI: 214。イスラームについては、EI: 489-491。
- (17) 表3 ⑧⑨参照。